

七月十九日

世田谷村狂奏曲はつづく。職人のような仕事をさせているうちに、性格が見る見るうちに変わって大人になってくれた奴がいる。全く鈍いままの無表情状態が続いている者もいる。最近つくづく痛感するのだが無表情状態には何種類かのタイプがあつて、自己防衛型の者と、ただただに鈍い奴、それと自分が表現できぬ奴の三種類に分別できる。

自己防衛型の間にも何種類かがある。得体の知れぬ自意識を持つていて、それから自由になれぬ人間。自分は少し特別だと言う誤解に基づく者。次に単にコミュニケーションが下手なだけの奴。この一連の能面現象は少し危険だ。早晚そのお面は壊れるしかないからだ。鈍い奴は何を言つても無反応だ。お前は鈍い、石ころだと言つてもキョトンとしてまわりを見廻している。自分のことでは無いのじゃないかのポーズだけが残る。ただただ差別化されることを恐れて、いるだけの奴。この能面現象、仮面現象は特殊なモノではなくもうすでに一般的なものになっているのじゃないか。誰もが多からず、少なからずそんな仮面をかぶっているのだが、少し昔までは時にその仮面劇をする自分を笑つてみせる演技力があつた。その演技力を私達はそこはかとな個性として、あるいは個人の特別な性格として楽しんできたのである。しかしその仮面から演技力が抜け落ちたとしたら、地のママに仮面と実体が一体化してしまつたとすれば、そこには何の實質もな

い。仮面と思えば実体であると逃げる。実体だと思えば仮面ですと逃げる。ずーっと逃げ続けるといふ本性が浮かび上がってくるだけだ。逃げ続けられるわけがない。

七月二六日

昨日より、世田谷村G A取材。

今日、午前中ほぼ写真に耐えられる状態に仕上げる。素人ばかりでよく仕上げた。

昨日久し振りに雨が降る。乾き切つた土に雨がしみ込んで、土ほこりをあげるのを見た。昔、子供のころ吉井川沿いの母の故郷で毎夏この土ほこりの匂いをかいでいたのを思い出した。三階の寝室に父親が使っていた机をあげて使い始めた。

七月二七日

天候悪く写真撮影は今日も休み。夜半にかけて台風が来るようだ。屋上の樹や野菜が心配である。若い人達の危険に対する本能的な直観力が著しく減退しているのを感じる。全ての対応が模型感覚でペラペラだ。構造的鈍感さやトンチンカン振りは全てそこからやってくる。コンピュータによる映像技術の進化はその事にますます拍車をかけるだろう。映像は決して人間に危害を加えない。自然は時に荒々しい裸の暴力として現実化する。台風、地震などの危険は生々しくリアルなものだ。しかも必ずやってくる。必ずやってくる危険に対しての本能が用意されていない。

ヒモの結び方や、他愛ない自然との附合い方の数々は皆両親が教えてくれた。私の両親は勿論、戦中派で父親は中国大陸で兵士として働いた。子供の頃、父親と銭湯にゆくと父の背中に沢山の傷跡があつてそれが人の眼を引いていたのを覚えている。父は戦

争で破傷風になっていてその手術の跡なのだった。その荒々しい傷跡は何かを私に教えてくれたような気がする。父は戦争のことは多く語らなかつた。余程のコトがあつたのだらうと思つ。それでも背中傷跡が荒々しい戦争の現実を私に教えてくれたように思つ。裸足で原っぱを駆け廻つて、ガラス片で足を切つたりすると、母親が眼の色を変えて心配してくれたのは、父の事があつたからだらう。戦争に関する私の本能的な拒否感覚はそつやつて生まれ育てられた。抽象的な思考や映像にルーツがあるわけではない。

歴史学は考えてみればその様な残された具体物から様々に想像力を働かせて少し昔の事実を推測することだらう。瓦のカケラ一つから古代の建築の全体を知ろうとすることであり、これは恐竜の骨や歯の一部からその全体が想像されている現象に等しい。

健忘症が現代病の特産物である原因は一つにその様な歴史を模索するカケラさえも打ち砕かれて粒子状になつていゝる事ではないか。全ての物質は原子記号に還元されるわけだが、その還元された原子記号によつて現象が再構成されようとしている。電子によつて現実の物体をなぞろうとする事が時代の潮流としてあるが、それには一定の枠が必要である。危険に対する感覚の消失はそれを物語つている。この事はもう少し考えてみる必要がある。

七月二十八日

朝、五時過に眼ざめるクセがついてしまった。下の古いボロ小屋で眠つて、上の新しい家によつてゆく生活が続いている。古い家と新しい家が積層状態であるので、上手く言えぬがまだこの状態から足を抜け切れない。家族は皆下で寝るのを好んでいる。長男次女が時々上で休み、寝ている様だが、それはあくまでキャンブ状態であつて、生活と呼べるような代物ではない。どうやら人

間は皆身の廻りの環境に対しては異常に保守的な動物であるらしい事はここでも又、再認識された。自分の家を建ててみてわかつたことの一つに予想以上に身の廻りの環境に左右される自分がいると言つことだつた。建築設計という仕事は生理学的視点から組み直す必要がある。が、それは私の役割ではない。もう十年若かつたらギリギリやれただらうに。失つてしまつた年月を今はただただ冷徹に眺めて、できればそのことを誰かに伝えたい。

朝七時十五分、眠くなつたので仮眠。